

R. Browning の宗教詩： *Saul* に於ける闇と光

野 口 忠 男

- I はじめに
- II 成立の経緯と聖書的背景
- III *Saul* の懊悩と *David* の歌
 - 1 Prologue
 - 2 *Saul* の懊悩
 - 3 無垢の歌と経験の歌
 - 4 悪霊からの解放
 - 5 魂 の 歌
- IV *David* の愛と神の愛
 - 1 *David* の愛と神の愛
 - 2 Epilogue
- V おわりに

I はじめに

Arthur Symons によると *Saul* は, “a vision of life, of time and eternity”⁽¹⁾ 「生命と時と永遠の洞察」であると述べられている。確かにこの詩には, 「魂の発展」を通して, 永遠の生命へ憧れる *David* の愛の精神が一貫して流れている。しかし *David* のこの宗教的な情熱を支え一層強める働きをしている存在は, 闇の世界で悪霊に憑かれて懊悩している *Saul* である。

詩人 Browning は, W. Blake と同様に, “night needs day, as shine needs shade, so good/Needs evils”⁽²⁾ 「夜は昼を要し, 光は影を要する, 同様に善も悪を必要とする」と語っている。怖るべき悪がなければ, 愛も信仰も意味をなさないのである。彼は昼と夜, 光と闇, 善と悪の対立を通して進歩と言う弁証法的な創造の原理を重視しているのである。

私達は、Davidを通して語られる劇的独白をDavidのみに焦点を絞って論ずることは、危険であり片手落ちと言える。そこで、闇としてのSaulと光としてのDavidの対立が、詩の中でいかに展開されているかをたどりながら、神に向かって開かれたDavidの精神が、神の永遠の愛をキリストの受肉(Incarnation)の中に把える詩人Browningの宗教観の精髓を考えてみたい。

II 成立の経緯と聖書的背景

Browningが*Saul*を完成させて行った経緯を素描してみたい。彼は1844年の12月に、二回目のイタリア旅行から帰り、留守の間に出版された書物を読みあさっていた。Christopher Smartの*Song to David*を見出し、これが*Saul*制作への着想を彼に与えたのである。彼は翌年の1845年1月に詩作に取りかかり、3月3日のMiss Barrettへの手紙の中で、*Saul*と題する詩を見せたい旨を述べている。彼女は彼にこの詩の制作を勧めるのであった。9月9日に、彼女はこの作品を*Dramatic Romances*に未完のまま発表することを提案し、彼はそれを受け入れたのである。

*Saul*の第二部の10節—19節は、おそらく1852—3年の冬に書かれたものと思われる。Browningが再び筆を取るまでに、実に8年と言う長い時間が経過しているのである。この期間に彼は、病弱なBarrettと結婚し、異国イタリアのフロレンスに住み、長男Penが誕生し、幾多の人生経験を経ることによって、人間と神に関する思想を深め発展させて行ったことは確かである。1850年に*Christmas-Eve and Easter-Day*を発表することにより、彼は久しく悩まされていた宗教上の諸問題を解決し、*Saul*を完成させる糸口を得たのである。最も大きな宗教上の問題は、神の愛の流出と啓示によって示されるキリストの受肉(Incarnation)の真実の表現であった。Browningは、この思想を盛るための枠組として、Sir Thomas Wyattの*Seven Penitential Psalms*を使用し、構造、イメージ、語句に関してWyattの後をたどっているのである。⁽³⁾この詩が完全な形で最初に発表されたのは、*Men and Women*に於いてである。

次に聖書的背景を考えてみたい。Browningは、聖書に通暁し、深く聖

書を読んだ詩人の一人である。彼はこの詩の主題をサムエル前書 16 章 23 節から得ていることは事実である。“And whenever a spirit from God came upon Saul, David would take his harp and play on it, so that Saul found relief ; he recovered and the evil spirit left him alone.”

「神から出る悪霊がサウルに臨む時、ダビデは琴をとり、手でそれをひくと、サウルは気が静まり、良くなって、悪霊は彼を離れた。」この史実に、詩人 Browning は、想像を多分に加味し、作品に時間と空間の広がりをもたせている。そのために Saul と David の生涯の輪郭を捕えておくことは、この作品を理解する一助になると言える。

当時のイスラエル民族は、ペリシテ人の圧迫をこうむり、強力な国家を必要としていた。イスラエルの預言者サムエルは、神の御旨を伺って王となる人を探すことになった。

Saul は、ベニヤミン族のキシの子で、容貌すぐれ、丈高く、勇気に富む青年であった。彼はサムエルによって見い出され、頭に油を注がれて王となったのである。彼はペリシテ人に押しまわれ、危機に陥った時、神の助けを約束したサムエルが現れないために、自らいけにえを神に捧げてしまった。それは神に背く行為であり罪を犯したことになる。その為にサムエルから王国は一代限りで断絶すると宣告された。さらに Saul は、イスラエル民族の宿敵であるアマレク人を絶滅させる神の命令に従わなかった。彼は獲得した戦利品を所有し、アマレク人の王の命を救ったのである。今度はサムエルは Saul を王位から退けることを言い渡した。

これを契機にして、神の霊が Saul から離れ、神から来る悪い霊が彼を悩まし始めたのである。彼はたびたび神経衰弱的な発作に襲われ幽閉された孤独な囚人と化していたと思われる。彼の気持を鎮めるために、David が召し出されて、豎琴を弾いて王に仕えた。古代の人々は、精神の病に対して、音楽が鎮静の効果を果たすことを知っていた。

Saul に代わってイスラエルの王となる David は、血色の良い目の美しい姿も立派な羊飼いの少年であった。David は、ペリシテ人の猛将ゴリアテを見事に石で倒し、名声が国中に広まっていった。彼は戦いのたびに名をあげ、Saul 軍の最高位まで登りつめるのである。Saul の心中にあった David に対するねたみと恐れが高じ、David 殺害を計画する。彼は

宮廷を去り、Saulの迫害を逃れるために荒野をさまよい歩いた。この荒野放浪の時代は、Davidにとって神の試練を受ける苦難の時であったと言える。しかし神は常にDavidとともにあり、彼の行く道を見守っていたのである。Saulがペリシテ軍との戦いに敗北し、自害すると、Davidはイスラエルの王となる。

彼は首都をエルサレムに移し、神の箱を丁重に取り扱い中心に神信仰のある神政王国を目指していった。彼の全盛時代に、私生活に於ける不和や我が子の反乱、バテシパとの姦淫の罪もあったが、人間Davidは実に、詩人、音楽家、聖者、神秘家、政治家、罪人などを兼ね具えた人物であった。

新約聖書では、イエスをDavidの家系から出現するとしている。Browningはこのことをよく踏まえて、本詩 *Saul* の中で、キリストの受肉を予言的に表現している。

私達は二人の小伝からも、Saulのねたみ深く、陰気で憂うつ症的な性格とDavidの明るく健康的で神愛の精神に満ちた性格を知ることが出来る。闇と光で象徴される二人の織りなす関係を次章で考えてみたい。

III Saulの懊悩とDavidの歌

1. Prologue

Browningは、Saulの従兄弟で忠誠無二なAbnerが、王に進言してDavidを招いたことにして詩を語り始めている。AbnerはDavidの訪れを待ち望んでいた。彼のDavidに対する強い信頼と期待が見られる。王は3日間薄暗い幕屋の中で祈りの言葉も神を讃える言葉も言わず黙している。それは王と悪霊との激しい戦いが終わり、力尽きて瀕死の人のように気を失っている状態である。ここには、少年Davidと老いた忠実な家臣Abner、Davidと悪霊に取りつかれて苦悩するSaul王の対照が巧みに描かれている。

神に愛されているDavidの描写は、“God’s child with his dew / On thy gracious gold hair” (II ll. 11-12)「美しい金髪に恵みの露がかかっている神の子」と表現されている。彼の奏でる堅琴の弦には、砂漠の炎熱を避けるために、青々としたあやめがかけてある。妙音を奏でる堅琴

を David がいかに大切に扱っているかがよく描写されている。彼はいつものように祖父の神“the God of my fathers”にひざまずいて祈りを捧げる。このことは、神を讃える言葉も発しない Saul の態度とは異なり、「神とともにいる」David を象徴する行為である。この神は、「イスラエルよ聞け。われわれの神、主は唯一の主である。あなたは心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならない。」⁽⁴⁾と述べられている通り、唯一絶対の聖なる愛と力に満ちあふれた厳しい神である。人間は神によって創造された存在であるために、神の助けを受けて生きて行かなければならない神中心の考えに立脚するものである。礼拝に関して Pierre Teilhard de Chardin の言葉を引用してみたい。

おお、礼拝するとは、とりもなおさず、測り知れぬもののおのれを失うこと、汲めども尽きざるもののおのれを沈めること、不壊なるものうちに平安を見出すこと、確実なる無限のうちに呑み込まれること、火と透明さのうちにおのれを捧げ、自己をますます意識するにしたがって、意識的に意志によっておのれを無とすること、底なきものに底の底までおのれを与えることにほかなりません。⁽⁵⁾

David は、一瞬の祈りのうちに自己の全てを神に与え、力と愛を受けたものと思われる。彼は、Saul の幕屋を目掛けて砂地を走って中に入る。この幕屋は、内と外、闇の世界と光の世界を隔てる重要な役割を果たしている。David がそこに見たものは、天幕を支える太柱に、寄りかかる真黒な姿であった。

……I descried

A something more black than the blackness — the vast, the upright

Main prop which sustains the pavilion : and slow into sight

Grew a figure against it, gigantic and blackest of all.

(III ll. 23-25)

……その暗闇よりもはるかに暗いもの

——天幕を支えているとても大きなまっすぐ立っている太柱を認めた。そして柱に寄りかかった巨大な真黒い姿が徐々に見えてきた。

真暗な幕屋と言う閉ざされた小世界の中で懊悩する Saul の元へ、David を象徴するかのよう¹に一条の日の光が天幕から射し込んで来る。ここには、開かれた草原の大世界と閉ざされた幕屋の小世界、神に守られている David と神に見捨てられた Saul、神と悪霊、黄金の光と黒の強烈な一瞬の対比が見られる。David は脅えることなく、堅琴を弾き始める前に Saul の姿を直視するのである。

2. Saul の懊悩

暗黒の小世界で懊悩する Saul が、David の堅琴によっていやされて行く経過は三つの主要なイメージによって構成されている。L. Lawson⁽⁶⁾ も指摘しているように、それらは十字架と蛇と岩山のイメージである。David が最初に目にした Saul の姿は、巨大な真黒い姿であった。彼が天幕を支える大柱に寄りかかり、直立している姿は、十字架にかけられているようである。

He stood as erect as that tent-prop, both arms stretched out wide
On the great cross-support in the centre, that goes to each side ;
He relaxed not a muscle, but hung there as, caught in his pangs
And waiting his change, the king-serpent all heavily hangs,
Far away from his kind, in the pine, till deliverance come
With the spring-time, — so agonized Saul, drear and stark,
blind and dumb.

(IV ll. 28-33)

彼はあの天幕の大柱のように、左右に突き出た中央の十字架状の梁に、両腕を大きく伸ばして、まっすぐに立っていた。それはまるで、激しい苦しみに囚われた大蛇が、春の訪れとともに助けが来るまで、仲間を離れて松の木に、実に重苦しそうにかかっているようである。——このように苦悶する Saul は、ふさぎ込み身を硬直さ

せ、目を閉じて沈黙していた。

これは Saul の苦悩の究極の姿である。神の深い愛により、十字架にかけられたイエスの苦悩とは異なり、神の法に逆らった罪の苦しみである。大蛇のイメージで捕らえられている悪霊は、エデンの楽園でイブを誘惑する蛇に通じるものである。Browning の悪の見方は、安易な optimism ではなく、悪を底まで洞察し光を与え、生の希望を生み出すものである。次に David の歌によって生じる Saul の生の兆を辿ってみたい。

3. 無垢の歌と経験の歌

David は、Saul に向かって豎琴の調べを合わせて弾き始める。まず彼は動物を賛美する歌を弾く。羊たちが集まって来る無垢を象徴する調べである。W. Blake の無心の世界を彷彿させる生命力あふれた描写である。David の無垢の歌は、畑に住むうずらたちが弾奏者を慕って飛んで来る曲、快活なおろぎたちが互いに戦い合う曲、す速い飛ねずみが瞑想にふける程の荘重な曲を奏するものであった。彼の無垢の歌は、奏者と動物たちが一つになって躍動する世界を示している。Browning の考えの中には、神の創造物はすべて人間と同様の愛を与えられ、この世で一つの家族をなして、心と心は互いに通じあうと言う共存の考えがあったのである。

次に David は、人生の様々な相の歌を奏して行く。意気投合しながら収穫に励む労働讃歌、収穫を祝う酒盛りの歌、次に死者を弔う野辺の歌、楽しい婚礼の賛美の歌、助け合いの精神を賛える大行進曲、祭壇に司祭が上がる時の荘重な合唱曲。これらの労働、結婚、協同の生活、宗教、死は、無垢の歌に対して経験の歌と言えるものである。David が無垢の歌と経験の歌を奏し終わった時、暗闇の中で Saul がうめいたのであった。ここで、David は豎琴の弾奏を止めて彼を眺めると、Saul がおののいたためにターバンの青玉や紅玉が急に輝いたのである。しかし Saul の身体は、動かさず真すぐにたっている。David は、再び身を屈めて一心不乱に豎琴の弾き続ける。

David は Saul の生涯に深く係わる経験の歌を奏して行く。岩から岩へ飛び跳ね、樅の大枝を幹から引き裂くこと、川の流に飛び込む時の

冷たい心地よさ、熊狩り、黄色く熟れたナツメヤシの実やいなごの肉のおいしさ、酒の味わい、河床に寝たことなどの壮年の日の生の讃歌を歌うのである。

“Oh, our manhood’s prime vigour! No
spirit feels waste,
“Not a muscle is stopped in its playing nor sinew unbraced.
“Oh, the wild joys of living!
……
“How good is man’s life, the mere living! how fit to employ
“All the heart and the soul and the senses for ever in joy!
(IX ll. 68-79)

ああ、われら壮年の日の血気盛んな力よ！
精神は疲れを知らず、筋肉も働きを止めず、腿もゆるむことはない。
ああ、生きることの無上の喜び！
……

人生はただ生きるだけでどんなに素晴らしいものか！
常に歓喜にひたって、全心、全霊、感覚のすべてを用いることは、
いかによいことか！

David は、Saul の父、母、兄弟、友達と歌い、国王となりあらゆる野心と名声を得た栄光の歌を奏した。ここに到って Saul の心中に大きな変化が生じるのである。今まで見て来たことは、主に Saul を中心とした歴史物語であった。Browning は、ここまで書いて久しく筆を絶ったのである。

4. 悪霊からの解放

David は、全身全霊を傾注して、Saul の苦悩を解き放つよう努めて来た。この時の弾琴の様子は、主の軍勢が、主に奉仕するうれしさに、全員緊張し天使の戦車を天翔ける天空の神と天使のイメージで描写されている。David は、思いあまって「Saul!」と絶叫する。その声を聞いて

て、Saul は魂を動かされ、悪霊が去って行くことになる。この様子を山と雪と春の女神の雄大なイメージで描いて行く。

巨大な岩山に積もった根雪は、春の女神の日の矢に射られて、地響きをたてて山麓へなだれ落ちて来る。太古の岩山は、裂け目もあらわに黒く生気を帯びてたっている。巨大な岩山は、Saul の魂、根雪は悪霊、春の女神は、神を暗示する表現である。神の矢に射られて、根雪が地響きをたてて山麓へなだれ落ちることによって、ついに悪霊が Saul の魂から去って行ったと解釈することが出来る。しかし久しく懊悩していた Saul は、すぐに健全な魂に立ち帰ることはできない。Saul が狂気の世界へ参入することなく、正気の世界で意識を取り戻した状態なのである。彼の茫然とした鈍い視力は、海にゆっくり沈んで行く蒼白い秋の落陽にたとえられている。Saul の魂が本来の姿になるためには、秋ではなく春の朝日が必要なのである。今彼はゆっくりと鼓動する胸に両手を組み合わせる。これは David に対して感謝の気持ちを表現し神に祈りを捧げる姿勢なのかも知れない。そうだとすると、Saul は苦悩のどん底で、神に対してかすかに心を開示していることになる。

5. 魂の歌

David は、回復したばかりの Saul の心を真に目覚めさせる方法について自問する。彼は再び堅琴を奏し、老いた王に肉体の快楽を退けて魂の存在を指向すべきことを語る。

“In our flesh grows the branch of this life, in our soul it bears fruit.

.....

“Leave the flesh to the fate it was fit for! the spirit be thine!
(XIII II. 150-160)

われらの肉体にこの生命の枝がそだち、われらの魂に実を生ずる。

.....

肉体をそれにふさわしい運命にまかせなさい！魂をあなたのものとしなさい！

David は、Saul の王としての情熱と武勇は、人民の心に浸透し、全世界に伝えられるけれども、人間にはやがて死が訪れることを語る。力と美の生命の酒を飲みほして、現実に囚われることなく、予言者の眼でもって世界の実相を眺めることを主張する。

“……Again a long draught of my soul-wine!

Look forth o'er the years!

“Thou hast done now with eyes for the actual;
begin with the seer's!

(XIII II. 175-6)

もう一度、私の魂の酒を飲みほしなさい。歳月を越えてかなたを眺めなさい。

あなたは今や現実に囚われる眼を必要としないのです。予言者の眼ではじめなさい。

David が Saul の心に確信を与えるために最善を尽くした結果、王は彼の熱誠に打たれて昔ながらの王に戻りつつあった。Saul は、右手で黒髪をなでつけて形を整え、ターパンのひだを直し、顔にしたたる大つぶの汗を衣の袖でぬぐい取り、腰帯を締め直し、止め金を前に回して、高価な腕輪に手を触れる。彼は、David の身の回りに大きな両膝を突き出し、そこに彼の頭を載せるようにして坐った。彼は一ことも語らず、片手を David の額に優しく載せた。彼は David の髪をなで、彼の顔をじっと眺めていた。この瞬間は、Saul の David に対する愛の表現として読むことが出来る。David は、この上ない歡喜にひたり、無償の愛を捧げたいと強く願うのである。

“Could I help thee, my father, inventing a bliss,
“I would add, to that life of the past, both the future and this;
“I would give thee new life altogether, as good, ages hence,
“As this moment,— had love but the warrant, love's heart to dispense!”

(XV II. 233-6)

わが父よ、わたしは至福をつくりだして、もしあなたを助けることが出来るなら、過去の生活に未来と現在の生活を加えてやりたいと願う。

私はいつまでも、この瞬間のように、あなたに新しい善い生命を捧げたい。

——もし愛に、愛の真心をつくす力がありさえすれば！

IV David の愛と神の愛

1. David の愛と神の愛

Saul 王との間に全人格的な愛の交流を体験した David は、靈感に打たれ、宇宙の真実の姿を悟るのである。今までの彼は、見たままを堅琴にあわせて歌う音楽家兼詩人であったと言える。これからは、真実を語り救い主を予言する David に変わって行く。彼は直観した真実を声高らかに叫ぶのである。

— all s'

love, yet all s' law.

(XVII 1.242)

すべては愛、なおすべては法則。

宇宙の一切は、神の愛から出ている、そこには厳然たる法則があるという神の理法である。彼は、人間の知恵や知識や先見は、無限なる神の英知に比べたら取るに足らないものであることをよく認識している。W. Blake と同様に、完全無欠な神の姿が、彼の心眼には見えるのである。

“I but open my eyes, — and perfection, no more and no less,
“In the kind I imagined, full-fronts me, and God is seen God
“In the star, in the stone, in the flesh, in the soul and the clod.

(XVII ll. 248-50)

私がただ目を開けさえしたら——

完全無欠なものが、私が想像するままに、わたしの目の前に現れる。
星に、石に、肉に、魂に、土くれに
神の姿を私は認める。

彼は神に対する敬虔なる念に強く結ばれている。彼は、自己の愛の力の偉大さを悟り、愛を与えてくれた神に対して、全存在を与えて行く覚悟を語る。

“I believe it! 'T is thou, God, that givest, 'tis I who receive :

“In the first is the last, in thy will is my power to believe.

“All 's one gift : thou canst grant it moreover, as prompt to my
prayer

“As I breathe out this breath, as I open these arms to the air.

“From thy will, stream the worlds, life and nature, thy dread
Sabaoth :

(XVIII II. 287-91)

わたしは信じる！与えるものは神、受けるものはわたし。

初めの中に終わりがあり、御意志の中にわたしの信じる力もある。

すべては一つの賜物である。

神はわたしの祈りを、わたしが呼吸し、大空に両手を上げるように
速やかに、聞き入れてくださる。

あなたの御意志より、あらゆる世界も、生命も自然も、あなたの恐
るべき軍勢も流れ出る。

David は、神を信じすべてのものが、一者である神から流出していると説く。この流出の思想は、*Paracelsus* に於いてすでに語られ、*Christmas-Eve & Easter-Day*, “Abt Vogler”⁽⁷⁾, *The Ring and the Book* と流れている Browning の中核を形成する詩精神なのである。

David は、堅琴によって Saul の魂を完全に癒すことが出来ず、自分の力の限界を知らされたのである。人間に出来ることは、

R. Browning の宗教詩：Saul に於ける闇と光

— 't is not what man Does which
exalts him, but what man Would do!

(XVIII 1. 295)

人を高めるのは行為ではなく、行なおうとする意志である。

これと同じ考えは、*Bishop Blougram's Apology* に述べられている。

Enthusiasm's the best thing,
…… fire and life
Are all, dead matter's nothing, ……

(II. 256-8)

熱意こそ最上のものである。

……

火と生命とがすべてであり、死物は無である。

人間の行為することの限界を知り、Saul にひたむきな無償の愛を捧げるとき、David が神に求める願いは、無限の愛を証してほしいと言う祈りである。

“T is the weakness in strength, that I cry for! my flesh, that I
seek

“In the Godhead! (XVIII II. 308-9)

わたしが最も強く求めるものは、強さの中の弱さ！
わたしが神の中に求めるものは、わたしの肉の生命！

David はこれを求めて遂に得たのである。キリストの受肉の真理を直感することにより、神の愛が証されたことを暗示している。

“……O Saul, it shall be

“A Face like my face that receives thee ; a Man like to me,
“Thou shalt love and be loved by, for ever : a Hand like this hand
“Shall throw open the gates of new life to thee !
See the Christ stand !

(XVIII II. 309-12)

おお、サウルよ、あなたを受け入れるのは、わたしの顔のような顔、
あなたは愛し、愛される、永遠に。
この手に似た手が
あなたに新しい生命の門を開くだろう！
見よ、キリストが立つ！

このことについて Donald S. Hair は、次の様に述べている。

David's love for the king leads him to conceive of immortality ;
and, because Browning is constantly affirming that human love
is a witness of divine love, David has a prophetic vision of Christ,
through which God confirms the validity of his desire.⁽⁸⁾

ダビデの王に対する愛のために、彼は永遠をいだくに到る、なぜなら
ブラウニングは人間の愛は神聖な愛を証すと常に確信しているの
で、ダビデはキリストの予言的な幻影を抱き、それを通して神は彼
の願望が強固であることを認めるのである。

この受肉の思想は、ヨハネによる福音書1章の14節で“*And the Word
was made flesh, and dwelt among us*”（「そして言は肉体となり、わた
しのうちに宿った。」と語られている。Tennysonも *In Memoriam* の中
で次のように歌っている。

And so the Word had breath, and wrought
With human hands the creed of creeds
In loveliness of perfect deeds,

More strong than all poetic though ;

Which he may read that binds the sheaf,
Or builds the house, or digs the grave,
And those wild eyes that watch the wave
In roaring round the coral reef.

(XXXVI iii - iv)

言は生命となって、人の手を借りて
あらゆる思想よりも強い
福音の書を
美しく完全な行為の中に記した。

麦を束ねる農夫も
家を建てるもの、墓穴を掘るもの
珊瑚礁の海辺の波を見守る
未開人もこれを読む。

Tennyson も Browning も実人生に於いて無私の愛を実践した詩人であった。Tennyson に於いては Hallam との友愛、Browning に於いては E. B. Browning との恋愛を通して、魂の永遠性を確認し、キリストの愛、究極的には偉大な神の愛に深く全人格的に関与して行ったのである。Browning の受肉の思想は、彼の宗教観の真髄をなすものであり、*Christmas-Eve and Easter-Day*, “An Epistle” “Cleon” に語られている。Browning は、Saul が心眼を開きさえすれば、新しい生命の門は開かれ、救い主キリストの立つ幻を直視し救われる可能性を語っている。

2. Epilogue

David は、奈落の底で懊悩していた Saul の魂に豎琴を奏し、神の愛を語って来た。彼が家路に帰る時が来たのである。彼は神秘的な体験をすることになる。彼のまわりに、多数の天使たちや霊体、言葉では語れない目に見えないもの、生命あるものが、現われもがきながら進んで行っ

た。大地はすべて目覚め、地獄は囚人を解き放ち、夜空の星は、感動して胸おどらせ、炎の中にきらめいていた。David は、実在の真実を直視しても気を失うことはなかった。それは神の御手が、彼を励まし支え、あらゆる心の乱れを鎮め和らげてくれたからである。ついに、狂喜もおさまり、大地も鎮まり、やがて暁となっていった。

David は、森に風に野獣に鳥にへびに新しい理法を感じたのである。この“new law”とは、神の愛によって救い主が現れ、すべてのものに永遠の生命が与えられると言うものである。この理法は、露にぬれている真白い花の面にも、杉の木にも、葡萄の繁みにも揺れている。詩は、理法の偏在性と永遠性を小川のせせらぎに託して終わっている。

V おわりに

Saul と David, 闇と光の対立と発展を通して、David が、神の永遠の愛を洞察する上で、Saul の存在がいかに重要な働きをなしていたかを理解することが出来た。Saul に対する愛の深化により、David の豎琴の歌の内容も無垢から経験へさらに魂の讃歌へと変化して行った。悪霊の退散後、二人の愛の交流が実現し、David は、本来の神の愛に目覚めて来た。すべては愛でありかつ法則であるから神の愛の流出、キリストの受肉へと真理が顕示されて行った。そこには、「全能の神は全愛の神」と言う旧約から新約への大きな神の経綸が、David を通して暗示されていると言える。Browning は、キリストの受肉により、Saul の魂が救われる可能性を示唆している。さらに詩人は、同時代の悪霊に囚われている人達に対して、無私への愛による魂の救いの重要性を David の仮面を通して警告しているのかもしれない。懊悩する Saul は、まさに現代の悩める魂を象徴さえしているのである。

〔注〕

- (1) Arthur Symons: *An Introduction to the Study of Browning*, Cassell & Company, Limited, 1886. p. 79.
- (2) R. Browning, *Francis Furini*, ll. 484-5.

R. Browning の宗教詩：Saul に於ける闇と光

- (3) W. C. DeVane : *A Browning Handbook*, New York, 1955, pp. 254-7.
- (4) 申命記 6 章 41 節。
- (5) テイヤール・ド・シャルダン「愛について」山崎庸一郎訳，みすず書房 pp. 94-5.
- (6) E. L. Lawson : *Very Sure of God*, Vanderbilt University Press, 1974, p. 82.
- (7) 「北星論集」(20 号) (1982 年)，拙文「R. Browning : Abt Vogler について」参照。
- (8) D. S. Hair ; *Browning's Experiments with Genre*, University of Toronto Press, 1972, p. 88.